宇宙の記憶

堀田（ほった） 素生（すなお）

ぼくは全てを知りたかった。
ぼくは誰なのか、宇宙は何故生まれたのか、世界とは何なのか。
ぼくはすべてを知りたかった。
ことばとは何か、すうじとは何か、りくつとは何か。
ぼくは全てを知りたかった。
苦しいのは何故なのか、愛とは何なのか、生まれてきてよかったのか。

ぼくに教えてよ、ねえ、そのしなやかな骨が、きみの壊れそうな心に似合わない程、しゃんと立っていられるのは何故なんだい？
ぼくに教えてよ、ねえ、何かを識るには何かを差し出さなければいけないよね。
ぼくに教えてよ、ねえ、きみがきみを差し出してくれたとして、ぼくはぼくを差し出せるだろうか。

ぼくは全てを知りたかった。
図書館の透き通る闇、夜がきみの言葉で深くなって、世界の真理はそっと息を殺す。
ぼくは全てを知りたかった。
誰かが自分をぼくに差し出した、ぼくは怖気づいた。
それでもぼくは全てを知りたかった。
宇宙で一番の勇気で、きみの可愛い唇を食む。そしたら全てを想起するんだ！
１３７億年前生まれたときのこと、ゆらぎの海を漂ったこと。４杯目のアルコールの辛さ、焼鳥の焼ける匂い、とろやかな目眩（めまい）、人生についての雄弁なおしゃべり。夕方５時のチャイムと子供の泣く声、天国に続く裏山の階段を、蚊の舞う茂みをかき分け登ったこと。

それでもぼくたちは何も識らない。
きらきらした暗闇の中で、お互いの輪郭を確かめ合いながら息をする。

誰かが来たから服を着ておくれ。